

日本橋川・神田川・隅田川

江戸・東京の川 体感型博物館構想

文：渡部一二（多摩美術大学環境デザイン学科）＋水路再生研究会

A 構想立案の起点

東京・都心部の歴史の変遷をたどっていくと、日本橋川、神田川、隅田川（以下、三川とする）が果たした舟運と市民に親しまれた水辺空間がクローズアップされてくる。その当時の賑わいは、歌川広重、葛飾北斎をはじめとする絵師たちが描いた絵図を見ていくと明らかになる。その背景には舟運で繁栄した情景が鮮やかに表現されており、誰もが納得する。

今では、人や物を運んだ舟運機能はほとんどなくなり、水辺は建築物で埋め尽くされている。護岸は、治水機能を高めるために垂直型のコンクリート護岸になっている。江戸時代から街道（交通）の原点とされてきた日本橋の上部には、高速道路が通り、当時の水辺の賑わいを想像することは難しい。江戸、明治、大正、昭和初期に生まれた三川周辺の絵図・地図・写真・文学作品などに心を寄せ多くを集めて見ると、水辺の賑わいの背景に輝きだされた人間模様、市民の人生観、街づくりの知恵、そして江戸文化の力が伝わってくる。視点を変えれば、川の空間を大切に、清く保ち、ヒューマンスケールの舟運利用をすれば、絵図のように魅力ある街ができるのだという「夢」を与えてくれる。「早く、復活することです」と、語りかけてくれる。

この再生の「夢」を実現する起点として絵図の力を活用することにした。絵図を解釈していくと、三川とその空間を、求めること「博物館」と見立てることで、三川に蓄積した展示資源（ソフト面も含む）を浮き彫りに（展示空間にする）できるし、再生に向けた知恵を得ることができる。

江戸の城下町が形成されて以来、三百数十年間、江戸・東京の中心部の都市環境には、絵図をはじめとして膨大な資料、情報が記録されており、それらの中には、三川とそれを取り巻く都市空間に今でも残像として刻印されている。このことに想いを寄せ先人に感謝しつつ、ここに三川の再生を夢見て、「体感型博物館構想」を提案する。

B 三川流域の特性

1 三川の位置

三川は、東京の都心部においてその平面形がループ状で位置し、これらに囲まれた流域内には千代田区が西側に、中央区が東側に入っている。日本橋川は、江戸時代から始まる舟運と商業で繁栄した当時の残像を水辺空間に刻んでいるが、上部に高速道路が通っており、市民の積極的利用は、いまだに静かな状態が続いている。



水道橋競河合＜広重画＞



ハッ見の橋＜広重画＞



日本橋雪晴＜広重画＞



日本橋（江戸橋）



東京江戸橋の真景＜小林清親画＞



鐘の渡し



鐘橋の図



日本橋通1丁目略図＜広重画＞



伊勢町河岸通り（小舟町）



神田明神祭礼（外神田2丁目）



湯島天神社＜広重画＞



お茶の水水道橋＜広重画＞



両国の橋＜国芳画＞



両国橋＜北斎画＞



両国花火＜広重画＞

隅田川



水天宮の図



隅田川舟舟＜清長画＞



新大橋＜北斎画＞



江戸橋付近の図



永代橋田中舟舟＜広重画＞

三川周辺の水辺で見られた情景を描いた絵図
江戸時代後期、水辺と関わる人や風景を描いた多くの絵図の中から抽出したもの

江戸東京博物館